

保健師 最前線

直接会って、伝えたい

京丹波町
保田 智子 さん



保田さんは平成6年採用のベテラン保健師だ。病院での実習中に、食事・退院指導をしっかりと何度も戻ってくる患者を見て、家での生活状況が気になり保健師を目指した。漠然と、小さい規模の市町村の方が住民に寄り添いやすいかなと考えていたところ、地元の近くで募集があり旧瑞穂町での就職となった。

現在京丹波町では、がん検診・特定健診の結果通知は、住民へ手渡しを基本としている。各地域の公民館を使い、保健師と栄養士で結果を説明しながら、生活面での改善点も指導する。また、働いている人にも結果返しの説明に来てもらえるように、日を決めて夜8時まで保健センター等で説明会を実施している。

「結果が返って来てからが重要なので。やはり直接会って話すと深刻さなども伝わりやすく、病院に行かないといけないと思ってくれるみたいです。」

精密検査が必要な人には、その場でフィルムや紹介状を渡すようにしているという。保健師側の労力も相当なものだが、住民側の意識も高くないとなかなか難しいように思うが？

「地域にもよりますが、検診結果は保健師からもらうものという認識が、京丹波町の住民さんにはあります。先輩保健師が、住民さんの相談に出来る限り応えてきた信頼関係があつてこそです。」

新人保健師の頃、住民から里帰りした孫の体重を量りに来てほしいという電話があり、驚くと同時にうれしく思ったと語る。地域に根ざした保健師活動を行ってきたことで、保健師が自分たちの生活を支えてくれる存在であるということが地域住民にも理解されているのだろう。

保健師として住民に接する時に心がけているのは、まず相手がどう思っているのか知ろうとすることだ。自ら気づいてもらうため、「大変そうですね」とか「それぐらい大丈夫」といった保田さん自身の思いを最初から出さないようにしている。

家庭では中学生から3歳まで、4人の子どものお母さんでもある保田さん。

「自分自身も生活者であり親であり嫁であるので、住民さんに寄り添って、一緒に頑張っていきましょうという気持ちでいます。」